

貴族の屋敷に忍び込むも不覚をとって捕縛されたクリスは
身に着けたもの全て剥ぎ取られて地下室に連れ込まれてしまった。

薄暗い部屋中央の台の上にクリスは全裸で縛られている。

台の脚は釘で打ち留められておりクリスの体重では
力いっばい身をよじってもビクともしない。

(うう……この匂い、頭がおかしくなりそう)

部屋の中は焚かれた香油の怪しげな芳香で充滿している。
肺に入れると頭の天辺が痺れ、彼女の思考を掻き乱した。

An anime-style illustration of a young man with short, spiky blue hair and purple eyes. He is lying on his back, tied to a wooden chair with thick brown ropes. He has a pained or shocked expression, with his mouth wide open. A lit candle in a dark metal holder sits on the floor next to him, with a small flame and some smoke. The background is a dark wooden floor with a diagonal plank pattern. There are some faint, stylized marks on the floor, including a small icon of a hand with a flame and some illegible characters.

「男みたいな色気のないカラダしやがって
——これでも被ってな」

傍の男がクリスの胴体にタオルを被せる。

自身の平坦な肢体を隠せて僅かに安堵するも
勿論これは彼女を慮つての行為ではなかった。

「んあッ!!……あッッッ」

男が柄杓で液体をクリスの上から降りかけた。
濡れた部分を強烈な焦燥感が襲う。

「お前ていつを盗みに来たんだらう？
たのびっつてやろっ」

クリスはこの屋敷の貴族が裏で禁制の魔薬を
売り捌いているという噂を耳にはしていたが
まさか自分が味わう羽目になるとは思っていなかった。

身をよじって振り払おうとするも
タオルが魔薬を吸ってそれも叶わない。



「ロップ半分が適量だそうだが
旦那からは壊してもいいと言われてるからな。
奮発してシャンシャン掛けてやるう」

たっぷりと魔薬を含んで濡れたタオルが
ぴったりクリスの肌に密着して
彼女の皮膚感覚を狂わせていく。

「ア、アタマがくらくらして……
胸と尻がジンジン痺れるッ」

タオルの貼り付く感触だけでも得体の知れない甘い痺れが生まれ、
それがクリスを身震いさせる。
乳首が硬く尖りはじめ生地をいやらしく押し上げていた。

十数分後——、タオルが剥ぎ取られるとクリスの平らな胸の上で尖る乳頭が現れる。

「貧相な胸の割にはスケベな乳首だな。そんなに期待してたのかよ」

「そ、そんなワケないでしょッ!!
寒いから硬くなってるだけだからッ」

「ふん。じゃあ直に確かめてやるか」

「な——ッ!!」

女を狂わす液体がクリスの秘部に
たっぷり注がれる。

男の指が彼女の膣に潜り込み
性感帯が内と外から魔薬に侵されていく。

「ああッ……ッあ!!」

頭を振り乱しながらクリスは
身体から溢れ出しそうな
官能を懸命に堪える。

「なかなかなか……。
おもしろいよ、本編は……」

男達の手の動きが一層激しくなった。

乳首は押し込まれた乳輪の中で親指ですり潰され
股間では陰核を根元を穿られながら
膣の敏感な天井を指先で抉られる。

「ふぉ!!……おぉ♡」

遂に限界を迎えクリスは
深い絶頂に呑み込まれた。

込み上げる快感の波に
仰け反って嘔ひ吼える。

「ぞらぞらッ、遠慮なくイキまくれッ」

「んあッ はあッ!!」

「ッああ♡」

ビチャビチャといやらしい水音を立てながら
男はアクメを極めたクリスの秘部を
ひたすら掻き回していく。

平らな身体の上でカチカチに硬く勃起し
悪目立ちする乳首と陰核が集中攻撃を受ける。

根元から摘み起こされすり潰されながら
指の間を転がらまわされていた。

「はッ……ッあ♡
——んああッ♡」

（イクのが——止まらなッ
気が——狂ッ——そッッ）

既に絶頂を堪えることが出来なくなったクリスは
立て続けにアクメを迎え激しい痙攣を繰り返す。

縛られた太腿の筋肉が浮き上がり
紐を引きちぎらんばかりに軋ませていた。

「まだくたばるなよ。
始まったばかりなんだからよ」

ギンギンに尖ったクリスの陰核に男はブラシを宛がう。

「♡……♡」

とたんに刺すような強烈な刺激が奔り
クリスは背筋を碎けんばかりにしならせ激しく身震いした。



「……あぎゃあッ♡
ん——にゃあおッ♡」

敏感極まった雌突起の先端をブラシで擦り上げられて
クリスは気が触れたような悲鳴を上げイキ狂った。

「ひでえ形相だな。
もう正気を失ったか」

「あッ♡あッ♡
——おあッ♡」

「擦り毎に視界に火花が奔り
目を剥きながら強烈な絶頂を何度も迎え続ける。」

男はフラシを中に突っ込み
クリスの敏感な天井を擦り上げる。


「んごっ♡うお
—ほおっ♡」

おとがいを突き出し硬直と痙攣を繰り返しながら
クリスのイキ狂い様はいよいよ激しさを増していった。

「お♡お♡おお——っ♡」

どれだけイヤっても男達は責め手を緩めない。

暴れるクリスの身体を力ずくで抑え込みながら
絶頂の口中にある秘部をフラシを掻きまわす。



時間の感覚も忘れるほどの連続絶頂を強いられ
クリスは息も絶え絶えになっていた。

疲労と過呼吸で意識に霞がかかり
胡乱な目で絶頂の余韻に打ち震えている。

快楽で蕩け切ったクリスの秘部に棒状の器具が挿入される。
持ち手の端には宝玉のようなものを取り付けられていた。

「むぐッ、う……ッ」

回にも同じような宝玉が詰め込まれて
猿轡を噛まされる。

「この魔導具は強烈だからな
心臓止まらないように踏ん張ってくれよ」




男が魔導具を起動すると上下の宝玉が怪しい輝きを放ち
クリスの全身がおびただしい光りで覆われた。

「おっゲー——♡」

一瞬で全身の感覚が増幅され体内に快感の電流が流る。
あつという間にクリスの頭の中は絶頂の光で満たされた。

「……そいつは女を強制的に昂らせてイキ殺す拷問具らしい
どっという感覚か俺らにはわからんが具合は良さそうだな」


男の言も既にイキ地獄に叩き込まれてる
クリスの耳には入らない。



更に魔導具の出力が上がり
身体から眩い光を発するクリス。
体内で暴れ狂う快感の紫電が
皮膚を貫いて体外に進った。

「んっ♡おっ♡おっ♡」
「……おっ♡おっ♡」

人には味わえない地獄のようなアクメを継続して極め
脳細胞が絶頂の熱でグズグズに蕩ける感覚を
クリスはひたすら味わされる。



体内で増幅された快感の電流が
尖がったクリスの先端から噴き出していく。

噴出経路に晒された乳首と陰核が
内側から強制的に押し上げられ
極限まで勃起させられて震えている。

尖りきったクリスの三つの先端に
ヒルのような淫虫が喰らいついた。

無数のイボが生え揃った口の内部で
ガチガチに硬くなった勃起粒を
解すように咀嚼していく。


「お……♡♡♡」

敏感すぎる神経塊を甘噛みされて
狂ったようにクリスはイキ乱れる。



いろいろな体液を撒き散らしながら
クリスは凶悪な快感の沼でのたうち回り続ける。

——その後、地獄の連続絶頂は
意識を失い、身体がただ反射的に
震えるだけになるまで続けられた。



男達により数時間かけて休みなく絶頂漬けにされ
疲労困憊のクリスの精神は尽き果てていた。

正気は最早吹き飛び、荒い息を繰り返しながら
未だ絶頂の余韻で何度も身を震わせている。



乳首と陰核は愛撫と魔薬の作用により異常なほど肥大し硬く反り勃っている。

クリスの三つの雌突起は呼吸の震えだけでも達しそうな程に淫らな性感神経の塊と化していた。



「ずいぶんと卑猥な雌チンポに育ちまったな」

男達が指で自己主張激しい勃起粒を押し潰す。

——途端に、クリスはまるで雷に打たれたように
背筋を反り返し、全身を絶頂で激しく震わせた。

「ぐわん♡ ぐわん♡
——あぶさ♡」

強烈な快感で無理矢理覚醒させられたクリスは
起きて早々、絶頂地獄に叩き込まれる。



「おお♡おお♡
—んおう♡」

雌突起を根元から先端までネチネチと指でシゴき抜かれ
クリスは何度もアクメを重ね続けイキ狂う。

「これだけデカくなると弄りがいがあるな」

痙攣が止まらずイキっぱなしのクリスを嘲笑いながら
男達は手を休めずに彼女の泣き所を弄り続けた。

反応が弱くなると気付けとばかりに魔薬を注ぎ
男達はクリスを休ませない。

クリスの精神は幾度も快感の天井を突き破らされ
度重なる絶頂に摩耗しきっていた。

「しょうがねーな、ちよっと趣向変えてやるか」

両脇の男はクリスの乳首を咥え
回の中で乳頭を転がし舐める。

「……おっ♡くおっ♡
おおっ♡」

先程までとは違った熱く柔らかく絡むような刺激で
クリスの嬌声から生氣の色が戻りはじめた。

男はクリスの唇に舌を潜り込ませ腔内を舐りまわす。

増幅された感覚のせいで頭蓋内を舂めまわされる錯覚に陥り
クリスの意識は絶頂の中でグチャグチャに掻き乱されていた。

「んんっ♡ びく……っ
—んおっ♡」

「んんっちまうと可愛いもんだな」

そう言ってクリスの秘部を回いっばいに頬張った男が
回内で震える陰核をしゃぶり抜く。




男達は死体に群がる蟻のように
入れ代わり立ち代わりクリスの肉体に集っている。

「おおッ
うぐッ、おおッ♡」

回内には男根を捻じ込こまれ喉奥を突き崩されていた。
隙間からくぐもった呻き声が
卑猥な空気の破裂音と共に漏れ出ている。

全身の性感帯を男達の舌が這いまわり
果てのないイキ地獄にクリスを追い立て続けていた。



すべての突起は扱かれしゃぶられ、
あらゆる穴は舌と指で穿り返され――
部屋中の男が満足するまでクリスは全身を貪られ続けた。

——日が暮れる頃になって
ようやく乱痴気騒ぎも終わりを迎えた。

『そろそろ俺達も引き上げるか』

男はそう言ってクリスの頭を撫でながら
喉奥に精を吐き出す。

クリスの意識はとうに絶頂の向こう側に吹き飛び
抜け殻のような表情で男の男根を啜っていた。

肉体だけが健気にも
快感の刺激に応じて震えている。

人間が生涯で得る快感総量の数百倍を一日で叩き込まれれば
少女程度の精神が破壊されるのも当然の帰結であった。

「愉しかったぜ、嬢ちゃん。
朝まで生きてたらまた遊んでくれよ」

——最後の男が扉から出ていき
部屋には食い散らかされたクリスの成れの果てだけが残った。





男の気配が消えて暫くの後――
濡れ雑巾を引き摺るような水音が部屋に木霊する。

隅にある床下扉から触手のようなものが這り出し
中央のクリスの元に近づいていた。



突如、出現した蛸のような化物が
クリスの頭と股間を呑み込んだ。

無数の繊毛触手で埋め尽くされた口で
クリスの身体を嚙りはじめる。

実のところ魔薬の原材料は
この生物の体液から採られていた。

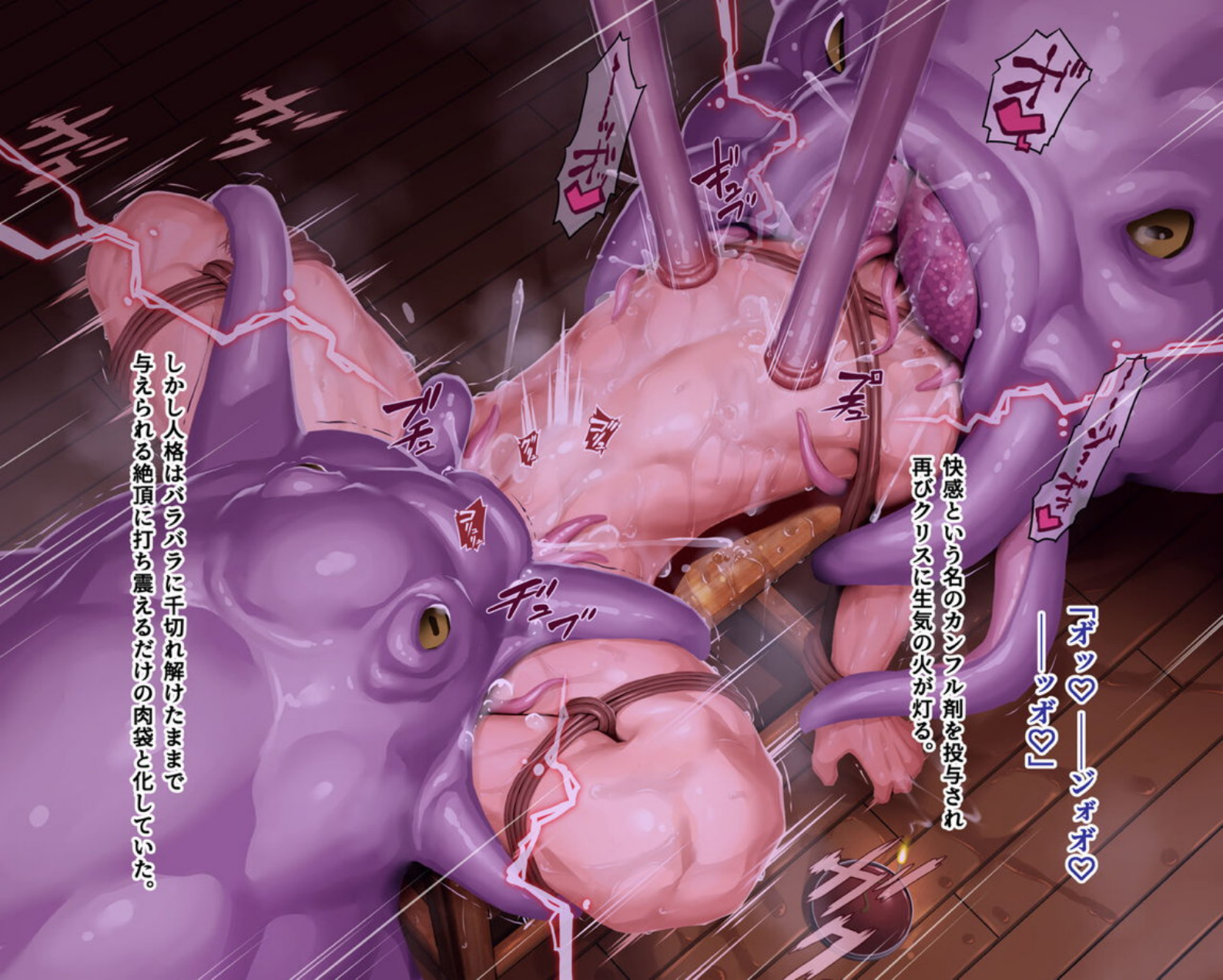
今までクリスを狂わせていた魔薬——その原液に直に曝され
疲弊しきっていた彼女の神経群は強制的に覚醒させられる。

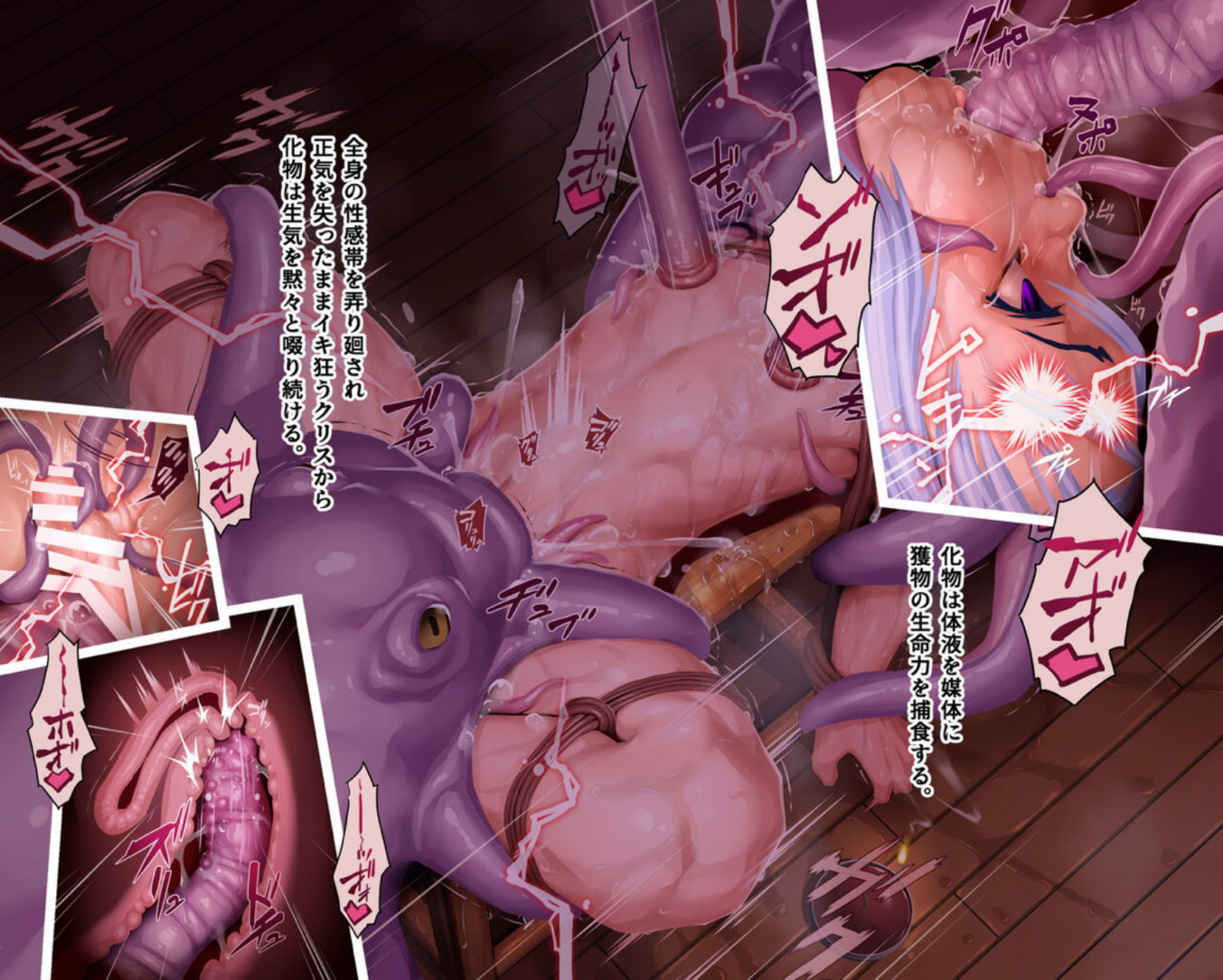
彼女の肉体は再び身を灼くような快感で満たされ
筋肉が硬直を繰り返し返し激しい絶頂痙攣に陥った。

「オッ♡——ッオオ♡
——ッオ♡」

快感という名のカンフル剤を投与され
再びクリスに生気の火が灯る。

しかし人格はバラバラに千切れ解けたままで
与えられる絶頂に打ち震えるだけの肉袋と化していた。





化物は体液を媒体に
獲物の生命力を捕食する。

全身の性感帯を弄り廻され
正気を失ったままイキ狂うクリスから
化物は生気を黙々と啜り続ける。



彼女のイキ地獄は力尽きるか夜が明けるまで終わらない。

煮立った絶頂の鍋の中で化物の餌食と化すクリス。







































































クッ

クッ

クッ

クッ

クッ

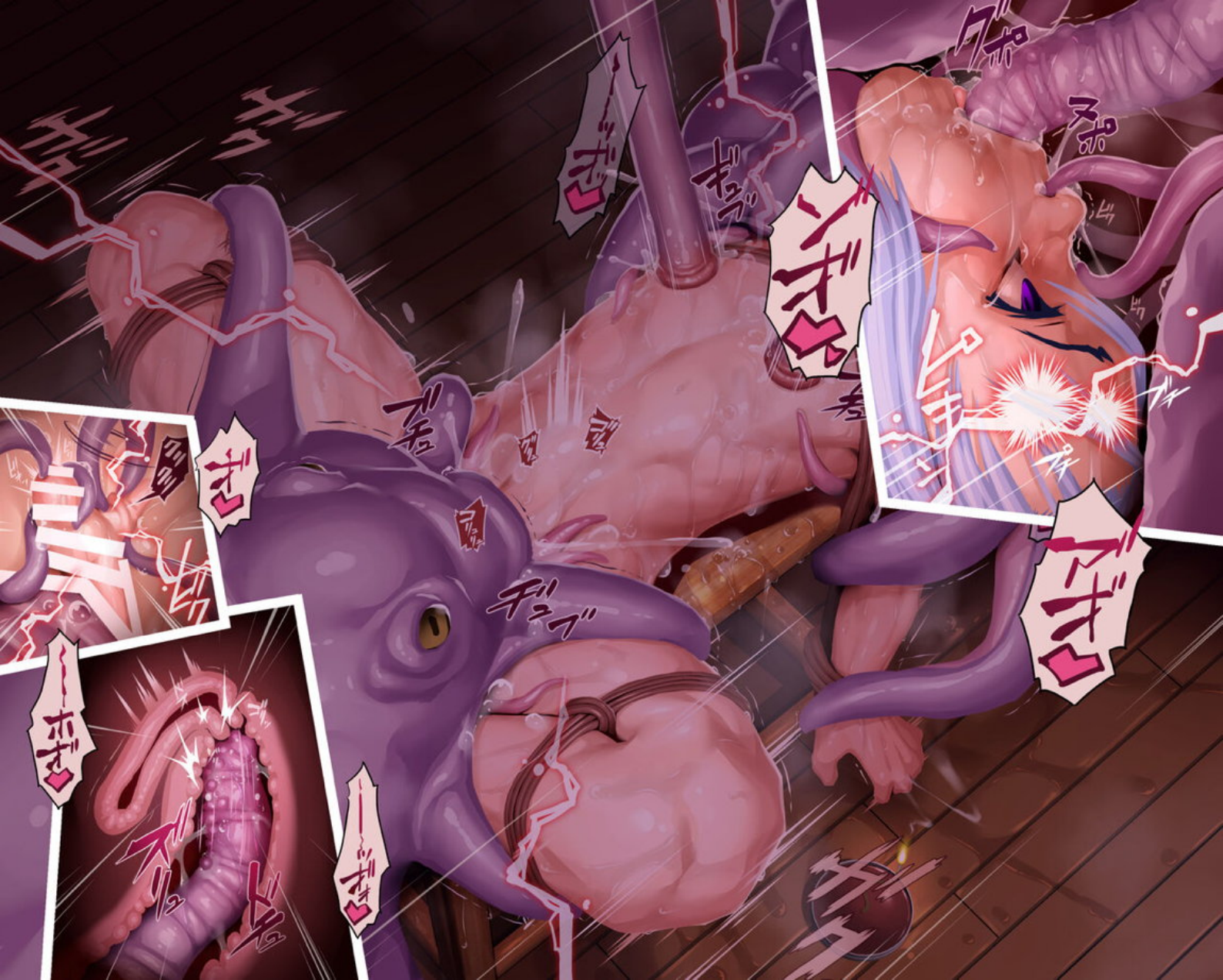
クッ

クッ

クッ

クッ

クッ





アッ

アッ

アッ

アッ

アッ

アッ

アッ

アッ

アッ